

森崎和江

二つのことば
二つのころ

ある植民二世の戦後

二つのことば 二つのこころ

ある植民二世の戦後

森崎和江



筑摩書房

二つのことば・二つのこころ

一九九五年七月十五日 初版第一刷発行

著 者 森崎和江

発行者 森本政彦

発行所 株式会社筑摩書房

〒一一一 東京都台東区蔵前二一五―三

振替 〇〇一六〇―八―四一二三

印刷
製本 中央精版印刷株式会社

ISBN 4-480-81383-7 C0095

©Kazuo Morisaki 1995 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。ご注文、お問い合わせは
左記へお願い致します。

筑摩書房サービスセンター

〒三三 大宮市櫛引町二六四 電話 〇六六五―一〇五三

森崎和江（もりさき かずえ）

一九二七年四月、韓国の大邱に生まれる。敗戦直前に福岡県女子専門学校に入り、そのまま敗戦を迎え、福岡に住む。筑豊の女坑夫の聞き書き『まっくら』（三一書房）をはじめ、『からゆきさん』（朝日文庫）、『慶州は母の呼び声』（ちくま文庫）など多数の著書がある。

目次

生きつづけるものへ

I

一行の言葉

16

II

わたしのかお

20

故郷・韓国への確認の旅

31

訪韓スケッチによせて

42

土塀

61

小屋と蝶

78

*

媒介者たちと途絶と

ある朝鮮への小道

——大坂金太郎先生のこと

III

ちいさないわし

詩を書きはじめた頃

私を迎えてくれた九州

ふるさと考

草のうえの舞踊

ひとり舞う田植え唄

地球村のびっくり子ども

開幕のベルが鳴る

188 182 168 151 137 126 123 120

106 89

IV

二つのことば・二つのところ

同質性のなかの異族の発見

水中の墓

朝毎に通ひましき

鮭神信仰

「天皇国」の中の女性

あとがき

二つのことば・二つのところ

——ある植民二世の戦後

生きつづけるものへ

それは一九六〇年代の前半の年月だったと思う。私は二人の子を連れて、幾度か、英彦山ひこさんの麓の町の、とある浄土真宗寺をたずねた。英彦山は福岡県と大分県の県境にある修験道の聖山で、山には杉の巨木が茂る。昼なお暗い。修験者たちの庵の跡が杉林の底に連らなっている山である。

その天然杉の山に引きつづいている山腹の、混成林を切り拓き、点在する山ふところの集落の人びとを移転させて、ここにダムを造るのだという。私が訪れた正応寺しょうおうじもまた湖底に沈むのである。そのことを、京都の本願寺に勤めている旧友から知らせられて、祖先伝来の居住地を失うムラの心ともいうべきものにふれて、日本を知りたいと願ったのだった。

一九四五年八月十五日、敗戦を知った直後から、私は生きる場を失った思いに襲われていた。それは日を迫る毎に深くなった。植民地朝鮮で生まれて十七歳まで、現在の韓国で育っていたためだった。敗戦の年も翌年も焼跡の福岡市の、旧九州帝国大学の図書館で、わが罪業の跡を訪ねるが如くに、朝鮮総督府の資料をあさった。そして同時に、原始仏教関係の書を探した。その彷徨の折々に、今は僧籍にある旧友とも戦後について話を交していたのである。彼は、宗教改革を求めつつ、労働戦線から

僧籍へと転身して熱心に親鸞の教えを具現せんと努めていた。正応寺もその仲間かと思われた。

子を伴って訪れた。福岡県添田町津野にある寺である。寺の裏庭は山林へとつづいていた。庭石や草木の間を絶えまなく清水が流れていた。私の息子と同一年ほどの少年の姿もあり、山のけはいの静けさの中で私たち親子はすっかりくつろいだのだった。

そんな昔日の姿を、ここに記すのは、ほかでもない。戦後五十年になろうとする今年の冬のこと、私は三十年ぶりにダムに沈んだ集落を、ダムの下流へ移転した正応寺の現住職——かつての少年に案内されて眺めたのだった。それは水不足が長びいている福岡県の、いくつかのダムがいずれも湖底を現わしつつある時だった。

山腹にあった正応寺の跡も、その近くの小学校の校舎の跡も、そして校門のそばの石橋も広い湖の底から姿を現していた。石橋の下を、かつての川が、きらきらと細く光って、ダムをめぐる車道の端から眺められた。ダムの底には長びいている雨不足のために草が茂り、バイクや車の跡が駆けめぐっていた。

私に、かつて訪問した夜、山上から眺めた夜景がありありと浮かび上がった。それは見事な月夜だった。夜霧が立ちのぼっていた。そして、小学校も家々も寺も氏神の社も森も、あたかもダムに水がたたえられたかのように霧に沈んだ。その霧の上に月影が射し、はるか対岸まで一面の湖の趣を呈したのだった。

その夜景のように、ここにダムは造られた。貯えられた水は、県内の他のダムの水と共に、農業工業そして都市化のすすむ市街地の生活用水となったのだった。それでも発展する戦後社会の水は常時不足がちで、県下の一級河川である筑後川の水も川の流れにさからって福岡市街へと送られるように

なったのだ。

戦後五十年という時間の層は、戦争とは何であったのかという問を深める作業もあわあわしいまま、私たちの暮らしを豊かにした。そして人びとにとって、豊かさとは何か、を問わずにおれない情況を生み、そして現在、私は孫世代から問われているのである。

幼稚園児の時、孫は私に問うた。

「人間はいつほろびるの？ 今、地球は病気だよ。森林ハカイって、なに？」

小学一年生の時、彼は私に語った。

「ああ、タイムマシンがほしいなあ。この丘、前のまま林だったらよかったのに」

戦後五十年、今年彼は三年生になった。

「戦争のあと、おばあちゃん、何していたの？」

そう問う。私は心が立ちすくむ。

そして、いくつもの、幾代もの親たちの、ぼうぜんとして立ちすくんでいる姿と重なるのである。その中には、開戦時の私の親もいる。

私の中には、水涸れたダム、の底から現れたムラの姿のように、国益のためとて、ふいに失わせられた多くの庶民たちの生活の跡が、記憶もなまなましく沈んでいる。それは開戦によって崩壊した生活や人生。次いでエネルギー革命によって棄民化された炭坑の暮らし。さらには、山には何もないとつぶやいた山里の農家の中学生のまなざし。そしてわが孫の心に映じている風土の姿。

敗戦後に私が最も苦しんだのは、私という人間の心を養育してくれたものが、朝鮮の風土であった、という点だった。一人の人間は、環境の中で育つ。それは家族環境にかぎらない。学校とか地域社会

にとどまらない。国家の力も及ばぬ深みの中で、育つ。それは、幾代にも及んだ生活が織り成した自然界である。

原始の天然ではない。人びとの汗と血と涙とでくりかえし耕やされよみがえる世界。

風も雲も太陽も人びとが暮らす地面の上に、生命が地球上に誕生した最初の頃さながらに訪れつづけながら、地上のそこそこに固有の風土を展開させた。母親の乳を吸いながら、私たちはその環境を呼吸して開眼する。自然と社会との接点にある自分について。そしてやがて、ここそが現実の時間と考えられていた政治的所属の場へと運ばれる。

日本は、近代国家として政治体制を整えた明治二十年代に、国益の拡大を国是とした。日清日露開戦以降、領土の拡大は聖戦と呼ばれた。聖戦に命を捧げるのは国民の名誉だった。私が生まれた朝鮮の当時の姿も、台湾や樺太の日本国家による領有と同じように、国家意志の顕現なのであった。幼時の私へ語りかけた父の言葉と無言の意味が、今はよく読める。

敗戦と占領軍の駐留ぬきには、日本による領有の解体はありえないほどの国家意志を、それら領有地の人びとに日本国は及ぼしていた。

それでも、朝鮮の風土はさんざんに日本人に荒らされながら、その固有性を保っていたのだった。

あれほど急速に、近代化されながら。あの地で私の心をとらえたものは、近代化の表層部分ではなく、あたかも天と地とを結び合わせているかのようにゆったりとひろがっている朝鮮の村々だった。それは私たち家族や日本人町の遠くにあり、朝陽や夕陽の中で見えた。山やポプラやアカシアや白い細い道と共に。そして夕暮れと共に、どこかの村から、チャングを打ちならす音が風に乘ってきた。地平線のあたりから。

その天と地の間を、白衣の民族服を着た大人の男女が夜ふけまで踊りつつ、ゆったりと天地を結び合わせているのを感じてしまう。そこにある祈りをふかふかと子どもは感じてしまう。まるで、高くそびえるポプラの中に、無数の雀が眠りに帰っていくように。幼い私もまた、何一つ朝鮮の言葉も知らないのに、その風土を支えている千年二千年という時間の中へもぐりこんでしまう。そんな力が、風土という自然と精神とが織り成した時間の総体にはこもっていた。

戦後五十年たつて、孫世代が、自分の内側にしか安住の場はなく、存在の外側は生命をおびやかす世界なのだと、あえぐかのように私を見る時、私は耐えがたい思いになる。それは、私が、敗戦直後以来、私にゆるされた外界のありやなしやを、自分の内側の罪意識に追い立てられつつ日本のそこそこをさまよった時の、まなざしと重なる。

こんなはずではなかった、と思う。

平和に、そしてすべての人が豊かに生きられるように、と私も願いつつ生きてきたつもりであった。微力を尽くしてきたつもりであった。たとえ私の彷徨が、日本の中のごく限られた少数者の、日本探しと自分探しであったとしても。それでも植民二世の原罪の故に見えてきた新世界を求め、同じあやまちを人類が踏まぬようにと、何らかの普遍を求め、五十年間をさまよい生きてきたつもりであった。

まるでダムの中の底の、細いかつての川のように、水を失ってようやく見えてくるものは、豊かさの幻想の底で飢えている未来の子どもの視線かも知れぬ。それは私が植民地朝鮮で、たらふく食べ、ぬくぬくと太りながら、登校の行き帰りであちちと見ていた現住民の、裸の子の、澄みきった、そして悲しげな視線である。

私の原体験は、その幼い視線に色どられつつ、それでも天空へと響き渡っていた風土の声だった。

それは、占有し、指令し、支配し、怒号を発する文明よりもはるかに尊いと、なぜ私は感じていたろう。

そして、帰国後、私が母国の中に探しつづけたものは、一代や二代の人生では勝敗など計れはしない根源的な人間世界への、同伴者だった。それは若くして朝鮮で亡くなった母や、引揚げていくばくもなく没した父や、父母のあとを追うように命を絶った早稲田在学中の弟の、夢とも希望とも呼べるものを、背中に貼りつけた旅だった。つまり、近代百年を越えるものだったのだ。

その途上、くりかえし、わが子に心で詫び、それでも旅のどこかで彼や彼女の自分探しの道程と出会うだろうと望んできた。

銀のすすきも針の山です

おまえの肝 あどけなく母をよび

わたしは河原で骨ばかり

親の罰 そらをおおい

かげは折りふして地を抱き

ごめんね おまえごめんね

陽に声をのみ やみに声を失い

名札など胸にさげさせ

いとしや下罪人の虹よ

よだれかけ赤い地藏です

おろかしい目汁をたれ でも

サタンはサタン

ごめんね おまえごめんね

この詩を書いたのは、津野の集落がダムの中に沈む頃のことである。

そして三十年後、またしても津野を訪れたのは、九州を襲った暴風が、戦後の植林の山の杉たちを、峰から峰へとなぎ倒した夜の、孫の叫びとその目に、私の五十年が耐えかねたからだった。

あの夜、彼はまだ幼稚園児だった。

「神さまのバカ！ 森林ハカイは大人のことだぞ！ 神さまが森林ハカイするなら、そんな神さま、足で踏んで、グチャグチャにして、捨ててやる！ バカ、バカ」

そう叫んで泣いた。嵐の中で。

私はあわてて、神さまはね、人間だけの神さまではないのよ、と、その母親が風雨の戸外で防風に動きまわるのを手伝いつつ、孫へ話した。

その孫に、私は自分の幼時が重なって見えたのだ。個々には防ぎかねる嵐は、私の幼い頃も吹いた。「ぼくは、和江のような姫御女^{ひめごじよ}ではないぞ。自由は、目に見えない力だぞ。お父さんは、たった一人

でも、熊襲だ」

そう言つて、父が笑つた。

嵐が父のまわりを吹きまくるのが感じられた。その親世代の挫折感に取りすがり、私にもまた無言の領域が育つていったのだ。それでも一九三〇年代四〇年代の地上には、永遠とも思えるほどの、月あかり星あかりがあつた。たとえ朝鮮神宮にはあかあかとかがり火が焚かれ、聖戦への突入はすべての被支配層の、個々の夢を砕こうとも。

その、月あかり星あかりが、孫世代にはない。彼個人が、せいっぱい夢を描こうとも。その夢と呼応する風土がない。そして、私の県下でも、中学生がいじめを苦に自殺した。

いつの世にも、いじめは存在する。かつての日本人の尊大さは、筆舌につくしがたいいじめを、個々にも民族としても国家としても行なつていた。自民族の中で、アジアの他民族へ向けて。

それでも、人間と人間の間や、人間の足元や天空には、個体の時空を越えた生命界が静かに生きていた。その呼吸が、しばしば人びとへとどいた。敵対する者どうしが、ふと、われを忘れて耳を傾けるほどに。そして子どもらは、親はなくとも育ち、共同体などなくとも育つたのだ、私のように。

その、生命の生存にとつての身体的基盤、そして心象的基盤が、今は崩壊過程にある。それでも現在の日本も、そして戦後五十年の先進国たちの文明も、子ども世界を無視しつつ突つ走るのである。

ごめんね おまえごめんね。

私は耐えかねて、今もって旅へ出てしまう。

ダムを埋めつくすほどに、山から杉の大木や杉の根が浮かんでいたのを、台風後にダムまで見に行った。見て、何になろう。それでも現地にふれて、自分の無知とはつきりと出会う。

台風の翌年は渇水だった。私はまた家を出てしまふ、水源の森へと。森はなくなっていた。ダムは底が見えていた。まわりには観光施設が、どこの水辺にも山間にもあった。客たちは、いづれ雨は降るさ、と考えていた。大人たちは行楽へ、子どもたちはいじめへと動くほかないインスタントな時空がひろがるばかりのようだった。孫は時折言う。ボランティアしたよ、と。つまり草取りや親の手伝いである。

私がかつて炭坑町で自分と似通っている人びとの止まり木を作ろうと努めたように、後続の世代はより強力な場を作りつつある、自然破壊に対しても。その人びとの力に支えられて、戦後五十年の昨今、私もどうやら九州の女のひとりに加わることができたかの思いを持つ。私の日本探しや自分探しは、同時代の力関係上の弱者のそばにすり寄り、力弱い者の内部にたたえられている現実観と強力な精神のバネにふれさせてもらうことだったのだらう。

帰国以来、今日まで新たに生き直す思いで、原体験を越えるすべを求めてきた。そのようなことは人間の心身にとっては不可能に近いと知らされながら、なお探しつつけてしまふ。その旅が可能だったのは、かつて私を育ててくれた韓国の、解放五十年の歳月が、いつも身近かにひびいていたからである。

福岡とプサンは距離的にも、まことに近い。空路で三十分。東京よりもちろん近い。博多港から連絡船で三時間。